



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園初等学校 校長 佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）、ワシントン補習授業校を経て、現職。

補習校と日本人学校への 新しい期待

◆ 30年ぶりの再会

私がハンブルク補習授業校で教えていたのは、もう30年前のことになりますが、先日、思いがけずそのときの教え子に再会しました。当時小学生だった彼女は、今はりっぱなお母さんになり、ドイツ語を日本語に翻訳する仕事をしているとのことでした。「私が日本語の力をつけたのは補習校のおかげです。」と彼女は言います。

彼女は、現地校でドイツ語の生活をしていました。インターネットなどはもちろんなく、日本語の新聞も数日遅れで届く貴重品だった時代です。週に数回の補習校の友達との生活と授業は、彼女の日本語体験の中で大きな比重を占めていたに違いありません。（当時ハンブルク補習校では、土曜日のほか、学年ごとに週日の夕方授業をしていました。）毎週提出する日記を書くことも、日本語を使う大切な機会だったことでしょう。小学校も高学年になると、一学年十人にも満たない小さいグループでしたが、みんなとてもよくがんばっていました。ほとんど100パーセントが、帰国を前提に滞在している子どもたちでした。生徒たちは、帰国してからも、あまり戸惑うことなく日本の学校の学習に入っていったようでした。

駐在員の保護者を持つ子が多く、メンバーは頻繁に入れ替わりましたが、短期間しか一緒に過ごさなかった仲間でも、気持



ワシントン補習校にて

ちの結びつきは強く、大人になっても付き合っている人たちがたくさんいます。

私は、その後ワシントン補習校でも教えました。二つの補習校で、本当によく努力するたくさん生徒たちに出会いました。二つの学校の課題をこなし、言葉の壁に立ち向かい、文化の違いに戸惑いながらも、困難な状況に負けないで、元気に生活する子どもたちの姿には、私自身も大いに励まされました。

ワシントン補習校は、土曜日が授業日でしたので、金曜日の夜は遅くまで授業の準備をすることになりました。そんなときは、生徒たちも眠い目をこすりながら宿題や発表の準備をしていることだろうと、連帯感のようなものを覚えました。補習校は、人と人のいろいろな関わりの中から多くのことを学べる場でもあります。

◆ 補習校への新しい期待

啓明学園ではアメリカで編入試験を行っていることもあり、私は、アメリカ各地の補習校の関係者の方々と直接お話する機会がたびたびあります。その中で近年強く感じるのは、補習校に本来の目的を超える期待がかかってきて、先生方や運営に携わる方々がたいへんな苦勞をされているということです。補習校の第一の目的は、言うまでもなく、外国で生活する子どもたちが、日本語で生活し、日本の教科の学習をして、帰国したときに日本の学校生活にスムーズに入っていけるように備えることです。それは昔も今も同じなのですが、最近の補習校の姿は、すこしずつ変わってきています。

一番大きな変化は、帰国しない生徒の割合が増えてきたことでしょう。ある補習校では、帰国する生徒の方がむしろ少数になっているということも聞きました。帰国する生徒とそうでない生徒とのニーズの違い、生徒たちの日本語の力の差、多様な保護者の期待などにどう対応していくかがたいへん難しい課題になっています。

補習校は帰国する子どもたちのために作られたのであるから、帰国を前提とした教育活動を行うべきで、帰国しない人たちのニーズに合わせることは本来の目的に反するという議論も